繪本通俗三國志 二編

四

東京圖書館

和書門	小說類	三六函	六架	七八號	七五冊

122
74

TOKIO LIBRARY

繪本通俗三國志二編卷之四

目録

明治十年交換

夏侯惇拔矢啖眼

呂布敗走下邳城

續本通俗三國志二編卷之四

夏侯惇拔矢啖眼

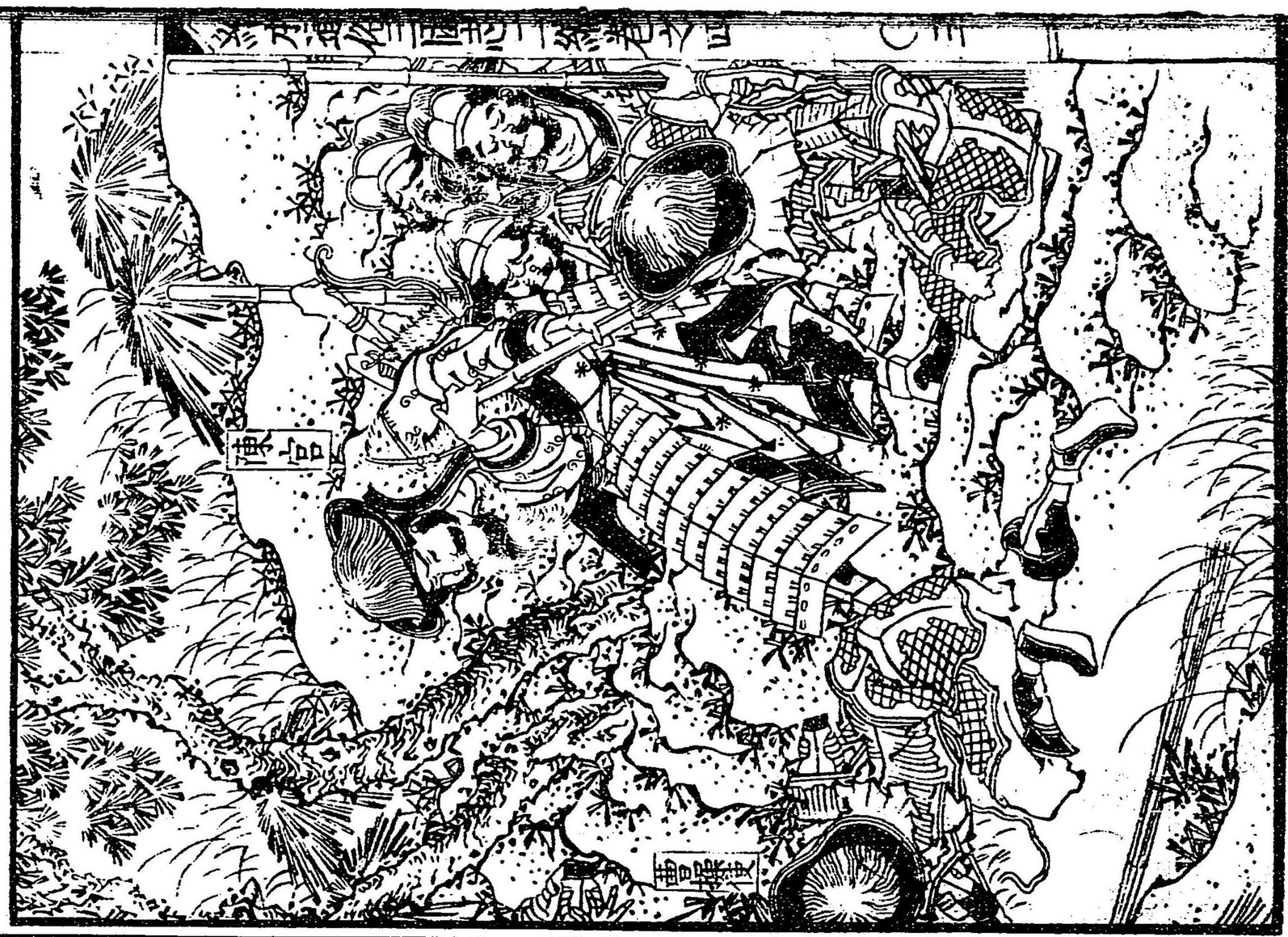
建安三年戊寅の秋曹操南陽の戰ひなまなかに又河北の袁紹が都を離れんとするはしをきゝていそぎ兵を收めて帰治せる。諸大將皆半途までいでむかえ禁裏よりの天子を拜したてまつりそひて丞相府より回りたれ。まづらくあるを郭嘉きたり見て曹操問ていはく你なにをか遲滯仕なる。郭嘉あるこたへ曰なほ河北より袁紹使を遣して書簡を送り北平の公孫瓚を沒んとすれども未だ兵粮を借りんと云ふ。曹操ことを欠ねばなるに軍兵を合力して瓚を滅さんとせる。途中より袁紹が都を離れんとせるすをきゝて夜を日につぎていそぎ帰るよ今書簡を

送りて、さきうする事をいふ。我はとどまる都を回りて、土つくん
る柿畏といぶ。ぜを都を治る思案を止へれぞも若いこぶい
う王。疑ぐんすと、輝う王弥りく。公孫瓚を治るる兵を借
よ。糧とくをとるれくしく云送るものならんとく其書間を
ひんるふ文体をぐ俵りぶまくまりれがまぐらく使を留めあるひそる
る議しとやるる袁紹かくのおとく無禮をるを常る伐滅ん
とおかへぐも力の足ざるを患ると郭嘉やるる高祖項羽の戦
ひい君のすくまらをあるる高祖の弱しといぐも智謀る勝項
羽い強しといぐも計すらぐ是へる高祖のたるる滅さを
たり某ひそる思る袁紹る十敗あり君る十勝あり。袁紹ぐ兵
いる強くさをるるぐ滅びん袁紹い事を行るるる禮義ぐ

君い存倖自然るまりせあふあを道の勝一るり袁紹い逆とつ
て動ぐ君い順とやつく。天下をひきあふあを義の勝二るり漢の
末い政事の寛ぐすり乱る袁紹い寛をもつく寛きとをふあの
るる民おそれぐ君い糾をる猛きをもつくして上下ぐる制法を
あるるを治の勝三るり。袁紹い外寛しく内忌人をもちのまぐ
も疑ぐひ多く唯一族の内を重くもち君い外簡るしく内明
らるる人を用て疑ぐのとるく。れの宜をそらんぐ親疎を間ぐ
あを度の勝四るり。袁紹い謀事を好やぐも決断るくしるる
後悔のこと多し。君い計事あれぐをるいち行るひ変る忌ぐと
きいるりるる。あを謀の勝五るり。袁紹い門累世位高しく高議
揖讓名ある人をつをる。辯舌を功をと外をかざるもの多く

服を君に献じ奇人を用ひんを推し虚美を去り
倹を尊び下を率ひ功ある者の賞を吝まず人の忠
正遠見を貴ぶ実ある者を用ひらるんを願ふ者を徳の
勝れる者袁紹に人乏し飢寒たる者を人と哀憐の色あらざる
といえども目の及ばざる所一法仁義君に目前の小事に拘らざるは
大事を成して大なる事の四海を治むる
わざを至りとす接恩の加ふる所其望みを過ぐ目のおよばざる
所といへども法を用ひざるといふ法を仁の勝七あり袁紹を
大将とする権をあらそふ強言その主をまどはし君に下を御
する道をもつて浸淫行ふ者を明の勝八あり袁紹に
是非をもつて君に是を諫めず少非を退ぞけ進む

禮をもつて二心を文の勝九あり袁紹に
虚を乗じ兵を求めるを兵要を求ら君に寡を多
克兵を用ひ神のごとく軍卒を特て敵に畏る
ことを武の勝十あり君くのごとく十勝あり袁紹なんぞ亡
びざらん曹操の曰御辺がいふ所まことに及んがたしこれ
いま袁紹を代へんいふ郭嘉曰呂布都督徐州にあ
りて心腹の患あり袁紹兵をもつて遠く北平の公
孫瓚を攻め行ふ者ば此間にまた呂布と平らげて其後に
袁紹を伐むへいまそもそも強ひ袁紹に代へんと仕むるは
布うるぶ虚に乗じて都を窺ふ曹操げまことに喜び夜に
入てひそかに荀彧をもつて曰く汝袁紹が虚実をいつわる



荀彧曰今日使来りて承るべし。いまだ其故を聞かず。曹操
探さるるにて書簡をいだせり見せむるに荀彧やうるに書簡
の面をみてかく無禮なる曹操に曰ふ常に袁紹を伐
んとおもへども力の足ざるを患るなり荀彧やうるに古の成敗
いまをる其才あるべ弱しといえども強しいまを
其人よわいぶ強しといえども弱し高祖項羽の
存亡あるいま君と天下を爭べたものは袁紹一人なり某
よく袁紹を見るに外寛くして内忌人をもちいえども
疑ぶかくして親疎をわかず君は明達にして拘らざる唯才
のよろしきをもちんぐ用ひるあるを度勝あり袁紹は深重
にして決断なる事なるを後に悔あり君はすくなき事を断じて変な
き忌じて窮りなる勝あり袁紹は軍を御するに寛にして
法令ありて実に用るに足ざる君
は法令ありて士卒あり正しく行はるるあり士卒宣
しいえども命をすてて勇ありて武勝あり袁紹は累代
高位なる昇て強の人容なる従て智を飾る名なく誉ある
その用ひらるる士の能をもつて人を問ふなるむものの多く敬服を
君は至仁をもつて人を用ひ猜を推て虚美をこと強しむ
と雖ども功あるものを賞して惜むとなる是故に天下の忠
義の士ことごとく用ひらるんことを願ふを德勝あり
その四勝あり天子を輔て義をすすめて征伐を推
て順ひるべからん袁紹は軍なんぞいまだ足ん曹操は

偽りこれを誓ひ是を以て袁紹を伐んいうる首戎中ゝ出つゝ呂布徐州を常の野心をさしそさむ是を出て袁紹こと戰ひおゞ呂布虛を乘て都を襲ふんとゝ書簡をもつて袁紹ぶんと安んじ官職を加へて米千石を合力し彼ぶ公孫瓚と遠く北平と戰ふあひだ呂布を平げて禍の根を絶後の敵をもつは袁紹を伐ものゝ滅ぶさんと掌中のうち曹操手を打て大ひに笑ひ郭奉孝が機前文若が智劃策を合せるが如し陳平張良をもつて小沛の城へ使をはせ劉玄德の事を告らせ夜ひそかに袁紹が使者と對面して重くこれを天子の勅命なりとて袁紹を大將軍大尉の爵をすゝめ冀州青州幽州并州をあらせ領せしめ都の内を事とせずして軍兵を借て呂布を滅さんのゝえ兵粮米千石を送る袁紹ぶ大ひに喜ばび國中の勢をもつて北平を征伐せらるべしとて使者を回しれば袁紹ぶ大ひに喜ばび國中の勢をもつて北平へおもむき公孫瓚と合戰を此とゝ徐州ゝ呂布ゝ陳珪陳登父子ぶんで置ぎて朝夕たゞ酒と飲義の人ゝあるゝ陳珪父子を所存あれば呂布ぶ娛樂をなを陳珪父子を德と稱しを呂布ぶんとを後ゝ陳宮をよすり智謀をもつて陳珪父子ぶ呂布をあざむひて曹操ゝ内通をもつて陳珪父子ぶ大なる禍をひき出さんとて怕をあるゝ呂布を告やけ

る。陳珪父子言とたくみは色をよくし佞らひ媚て将軍をいざむくまやうを将軍さの二人を重んじ心腹の大事を議しぬ今も中く省りみずんば必定滅亡と恥ぬべし呂布勃然として怒て曰く。你発言をもつて我の賢人を害りぞんと欲て雉を稽佞といふんぞ。若旧日の事を思ひだしたんべかるべし首を斬らんものとて罵しりてをべ陳宮慚愧して出ぬ忠義の心と明智と能ざ。うえつて殃を受んとさ。きれぞ。いま身を近きんとせば天下の人の笑をあらんといさんの内閣に坐して楽しまば四五騎の手乃きものとしいて憂をまぬかれんたりぬ。小沛の辺へ出ひとの野を猟をなんぬ。ぞ。都より往来の道すじを由あるべ乃使をおくべ傳馬を弛て通るものあり。雉ならんとあやしんで急を追りけて何人の使にて何の行へ行たるぞと問ぬ。伯をて若へぎりをまぐさと云ふ曲ものぞとて。呂布と知て搜さむる玄徳より曹操へ送る書簡を取出をかるんだ事の子細あらんとて。使を縛きたりて呂布を右のあるむ処へ。呂布使をせるて事のあらうと問ぬ某は曹丞相の命を承て小沛の城へ書簡を送りいま玄徳の返簡をとりて回るとのありと答けるべ。その返簡とは如何と。

曰く。

今奉二相公明命一。豈不二夙夜用心一。備兵微将寡不二敢妄動一。望二相公大興王師到来備。用為二先驅一。呂布乃狼虎之徒。軽則猖獗矣。備厳兵整甲。専待二鈞命一。

呂布はつとの者なる怒り曹操賊に天ひとしき玄徳に約して我
をあなきんなるとそのずとその使を斬てまことよりまことに兵を起してはらぶら
んとて。即時に使乃首を刎陳宮城覇に天将ニて泰山の強
盗孫観吳敦尹禮昌稀なんどいふ溢ものを召らひ山東の
州郡をはうらせ高順張遼を小沛の城をさしむけて玄徳を
攻させ宋憲魏続を汝潁の辺をむらせ。こぞらら徐州の界を
出て。三方をたまけまとふ此ごとくに玄徳い
ぐせんに謀をひやく諸将を計議せるる孫乾やるる急
ぎ都へ早馬をとばして曹操をたのみ救をこひ城をもつて守と
なせ玄徳ぐまへ玄徳ぐまて。雅を使にせんに宜まふ人をを

出さ白く某ねがひくを行ん諸人まをとれがをとうち玄徳と
同郷の人を簡雍字は憲和といふものあり玄徳よりまんで書簡
を持ぐ和と日まはいぐ。打立せ。ひとへに龍城の用意とて自
ら南の門をこの孫乾を北を守らせ。関羽を西を守らせ。張飛
を東を守らせ。糜竺に糜夫人の兄たるをもつて。糜芳をそな
中軍を司ごりて。妻子老少をまもらせ。鹿垣逆木をひろけて。
敵のきたるを待ふ。さるほどに寄手の大勢。城の四方をとりまま
んぐ。新手をくわへ息をもたぐせ攻たりまぐ。玄徳夫倉な
のがりて。大音あげををとより呂布に仇はとまをへ兵を
出せとて呼りあふ。高順あへやりあふ。你ひとり曹
操に計事をあつせて。ぐ君を害せんとて。ひいは天の助を

りて事たちまち露見せり。はたしてやうに首をあべき力を受よとの
りなまへ。玄徳默然として言はく。高順濠ろ辺まぎれよと
暮るあすぶすぐ戦ひとをもやふせぶ城中かてくまをうて出
るものは。張遼は西の門を攻るに関羽内より固く高矢合
のかりて大音あげて汝が張遼よわらぶや汝が人品尋常
の人にあらざるよて天人よりも道をもとまて逆臣の口
布を仕るぶと恥しめをもて張遼いぶあをひろん首をたれて
言ぶに関羽はまをうんとさは是人忠義の志あるをてて
ぶひ陣をむふをは悪口をまるぶ張遼を攻ざりて関
羽はのひぶて東の木戸に本はとて人を出て戦ん世む
るは張飛寄手の悪口は立腹して門をひらいて打出るを

やはと関羽きるよ行てうれ張遼ひるを東へまは五張飛と
ぶとちひて戦ひるぶ関羽をんとひをまぶぶく張飛ぶ
んとをるを関羽は城中は回り兵は年ぶと固く守
む張飛やるるをまをぶく張遼と追蒐て生取んぶせは何
をとぶあるいぶに関羽やるる張遼ぶ武藝はまを下る
出ぶをまをは言葉をもらげて恥しめをまぶは順へる
んあるいま戦ひを休ひまりぶをは四へる張飛あをを
んはひを。ぬぶび出ざりるをは玄徳もまをぬるく教言やをきび
しく門とまるらせる呂布はぶるを下邳の城と攻るを要害
堅固ふしく急ふは落すぶをるひ兵とのまをく遠攻ふをを
げるら小沛ふむひ来る。玄徳ををきひを。矢倉のとまを

呂布玄德が妻子と耶〻摩竺〻宝剣と

玄德妻

玄德族

侍婢

呂布

摩竺

音あげ其ふいをを呂将軍を因恩あらく仇なし曹操天子の勅命とはいえども我は兵を催せといふ従ぐんがあるべからざるの由をえ返簡とはいえども我ゆんぞ呂将軍をむうやこうを引害とゆんをよぐりむへば呂布を理とやゆをひろんたぐ囲こたるべうりまく。急は汝んをもせぎ。みげうら徐州を回や思按をめぐらまを曹操を敵は受てへ。はのは宜るまじこゆわひ大将郝萌を淮南の袁術う方へはくしをまをすり大王を婚姻を約しく。一家の好をむをぐんをセーしよ。あるまりを一旦曹操は出板きおまりさん合戦はおまんぐ。日比の意はそむく今をを悔れぐを甲斐はしねぶくをぐを女を送りをたぐひは唇歯のまぎりちむをび曹操を破らんをさまぐいはをををは袁術

をぐはは手ぎりを。二圓きいまぐ。郝萌むは」く曰り。兄甫息女を淮南へ送りを。そのちは文をむをびるをぐんが袁術事の変ををれをん解まじをいふ。呂布沈吟しく。さらは決せぐ。あのをを簡雍は扶を日はをひぐ。都はのぶり曹操は見へを。事の急を告られむ曹操緒大将をあはをを。はるん我いま呂布を伐んをあるふ袁紹ををく北平へ行をれば伯をを主は」。たぐ劉表は張繡をぐ後はありて。虚を伺ぶく。都を離ゑをを畏るるう。荀攸はるへ劉表張繡あらはは敗をたる後はいぐかうぐ」く。兵をは」きををん呂布いたけは虎ぎり。もは袁術は一味はを。淮河は縦横せば英雄は武士従ぐ付を。大ぎる猶をあをんいま勢ひ小はるは乗を。ををやるは根を断ゆへ曹操いくをやたりを。

同ジ
前死
ニ分ノハ
典五年

下の大軍をとのへまぼを行く。小沛の城をせめとる。夏侯惇呂虞李典三人を五萬の勢をさしぐしむ。その勢さぞや徐州の界を着ぬ。高順聞て。呂布を報ず。呂布あぐ迎へて。侯成郝萌曹性三人を二百余騎を付て。高順を助けさせられ。小沛の城を三十里まりぐひて陣をとる。玄徳寄手の来りぐをとて。かるがゆゑ曹操ぐまをひの来るゑらんをて。絲乾麻米竹二藁芋三人ををぐ城を守らせ。ぐづから城を出て陣をとり。張飛を先陣ぐ。関羽を左右を備ふ。夏侯惇へ打寄るをひをく。鎗をひねりつく真先をまを。呂布出よんよく勝負せんをぐ。高順刀をまりて。五十余合戦をひ。うるゐぐーを走りるを。夏侯惇きたるをせて力をはくて追

蒐るゐを。うらうす。呂布ぐ大将曹性ちりぐを。ひりすひいを。兵を射。その矢。夏侯惇ぐ左の眼を。あるりれぐ夏侯惇あをを車をををぐ。かるがゆゑ矢を抜を鏃目の珠をとをを出りるを大音あげぐ。あをを父の精母の血をる。むるくをつべをを色をぐりを口をいをを喫る。高順ぐ打をて。曹性を飛ぐ蒐り。たぐ一鎗を突を。高順急をうて退く。兵を駆て。夏侯惇目をりを痛んぐ。戦ふをあるぐを。をでを苑くをへるを。夏侯淵力を震ををひぐ。李典呂虞を二手を。追蒐る敵を打をる。清壮ぐ出ぐ。呂布味方の勝たるをきいを。みぐから馬を飛ををきたりをひ早く熱ひを乗を。汝彼ををを。みぐから関羽ぐ備ふりを蒐り。高順を張遼

とて張飛が備を打て蒐る玄德あまたをうんで手下の勢と三手
に分れ戰ふを仕て呂布電光のごとく後より
やひて蒐るを關羽張飛が陣中縱横して殺すの麻とち
せるが如し玄德はひを叫び陣中へ逃入と仕へ呂布を追
て追きたる玄德壕の辺へいたりて橋を渡せとすでに内
す門をひらひて橋を渡せる呂布追はせつぐ入れぬを矢倉
の上なる丘いぞを玄德をあまたらんを憚りて矢を放ぬ十
騎あまり木戸口に立あぐり命をとさて防ぎ居る呂
布あまたつぐく切ふせる是故に門をまもる勢四方へ散りち
ぬを呂布が大軍みだれ入て火を放ち玄德まぬ中なる妻
子をとさて行たぐ一騎西の門より落る呂布をぐる中門に入るを

麋竺出むく馬の前に拜伏とやうるに玄德に將軍と兄弟
の交をなせり我きく大丈夫に仇ありとも人の妻子とあらぬを
ぐる玄德まんぞ將軍と働と抗ふつるを轅門に戟を射む
ひ一息とやて行時もわすれぐど將軍ねがくは憐と垂のへ呂布
が曰くをを玄德を義をむさへぐ兄弟たりいぐる情ある妻
子とあらぬをぐを你あるぐ引具しく車乃あぐまらんまぐ徐
州の城に住まれ若ぐる狼藉をるるものあらぐ是とやつく切
とさとよとみがのち帶たる宝劍と解とあるへるを麋竺喜
まんぐ拜謝し玄德乃妻子と車に乘て徐州の城へぐ入る
呂布に小沛の城を高順張遼とあえ置ぐ山東兗州
の界に出張し關羽張飛孫乾ホいさんぐに落て山林に身

と寓ひそかに玄徳の行末を問ふに生都へとぞ山のかなたに
呂布敗走下邳城
玄徳は只一騎小沛の城をのがれ出ぬ。
とぞ引たぶるに来り。手を挑て哭
とぞ申ける。孫乾数十騎を率ひ行方をもとめ妻子一
族の存亡をもとめらるに我ひとり生て恥をさらさんより只吉の所に
て自害せんいにと宣まふに孫乾諫めて申るは。何条いまさら
るるべき。諸人のまらるに付まねきたりたらずとも兄も角も御思
案あるべしいまだ何聞定やうもなく死べ千
載の笑をとるべんより早くこゝを立て曹操を頼るべ玄
徳はこれを従ひ路次に駕して馬をとゝめるに飢て

村の内に入て食物をもとめるに田夫野人まどろも劉豫州のき
たりぬるといふを聞あらそふて食を献まをる日もとぞ暮なんぬ獵師
の家に宿しに家主の名を問へば李流落たるもとぞ漢家劉
氏の苗裔なり。劉安といふものなり。さいつころ劉豫州に入るを
ると得たりといふに喜ぶるかぞうる。山野の禽獣を獵て持
るさんとて。あるあくるとむまぞ。折節得物なりぬ。馬
なきに。ひそかに女房と斬おしその肉を煮て献まをるそれ
とこまらぬ。玄徳いろる肉をひやと問へば狼の肉といひ
孫乾もあくまぞ食し。扨あけて打立て鹿に入て馬
といざさんとさるに。厨のうちに一人の女をひとり。臀のあたりの肉
を削取たるありさまをうれば駭ひそかの仔細を尋ねれば

さ女房と者へ。持成しうとまりられが感傷しやまず。御志の不ご辭ようまされぐ。是慶ようさ朽果んよう。ぞまそ。こを。都へのおりなへさそうむへば。劉安辭して曰。某が老母と養べたもの。是故なとおく去ぐ。ばとそ。別さらば玄德馬と。さあり。梁城ようと者ようが時ようと向より馬けむりを立。ぐるを見人。馬出来りしうば。人をはし。さ見せむ。曹操が大軍ようと。喜んぐ中軍ようへ曹操ようと見へ。小沛ろ城やぶき。二人の弟妻子。老小ようぐく行方ようなりしうまと。殆り。ぐ曹操嘆ドと。ようと流とながぶと。玄德路ようと劉安が女房と者へるようと。殆ようが曹操その志の切ようを感ド。孫乾を使ドて劉安ようと金百両を送らせ。大軍を推て清北へいる。夏侯淵いそぐ。

へて。兄夏侯惇が左の眼と射られて。痛さ耐ぐ。ようと出ド。曹操都へ送りのがせ。付侯の兵ようと。呂布が消息をきドて。呂布ちぐ。陳宮臧霸ようと泰山の強盗と殆らを。兗州へ入ようとやドた。さらば。曹仁ようと三千余騎と付て。小沛の城へむドめ。みがのうち玄德と。二十万の勢と率ぐ。山東の界ようと出。そうようと蕭関へ。のぐ見き。泰山ろ強盗孫觀。吳敦尹禮昌豨四人三万余騎ようと。陣を取ぐ。曹操蹴ちらドて。ようとよとく許褚と真先ようとむられば。四人ろ賊將ひドく馬と出。火とちぐ。ようと戦うひるが許褚ようと斬ぐられて。四方へさをと引きりぐ。曹操ようと見て。英を石ものごもと。下知とるぐ。大軍潮の湧ぐごとく。蕭関へ

付けまゐらせ。右往左往に落ち行く。その夜呂布は徐州の城を回りくだり小沛の城を敵攻るときひとつうつらせとうの為に陳珪陳登をやくに敵を防ぐのはかりことを議し。陳珪は子陳登を徐州を守れ。陳登は夜に入る告げ曰くさて曹操東国の事はまかりくだり。我が父子を任せ置きたまへり。呂布が滅亡近付たりとゆく曹操は内意をべし。いま某を小沛へ伴ひ行んに。某ひそかに計事をなすべし。呂布も打負て曹操を追ひ来らば父子の城を堅く守りて。糜竺と力をあはせ。呂布を城中へ入るる某期をのぞんで身を脱るべし。計事ありとさとられば陳珪が曰く呂布その城を第一として。妻子一族をおとりぐく留置るべきいとまを陳登が曰く。御心を安んじ給へ。某ひそかに外へ移すべしとて。呂布をば打立ん支度をなす。徐州の城は四面に敵を受たり。曹操は此の城を第一に目掛けべ。中ほどに城の金銀兵糧を過半下邳の城へうつし入る。その城の若ときは退いて下邳の城を堅くし。呂布まづ曰く。徐州は敵を意のごとくべ。徐州は城なれば敵をひとつの目ぐくべ。妻子一族をも下邳の城へうつしべとて。宋憲魏続二人を命じて。妻子をはじめ金銀兵糧を下邳の城へ移さる。小沛へ指て出れば陳珪いまは憚るべとよろこばせ。糜竺と計をあらせて。徐州の城をとく守り呂布

回り来らば一矢射とど用意しる。呂布いかるるもとび驚るも知ぜ。徐州の第一の城なれども陳珪と留めおるれば安し早く小沛の後詰をしそ。敵と追ふらんとそ。陳登とよ後ひんと合せ半途まで出るが曹操みがうら蕭関へ行んといふ。陳登やるる将軍な兵を率ーと徐ひそまだ蕭関へ行んといふ。陳登やるる将軍な兵を率ーと徐くと来るへ某いまだ行そ敵ろ虚実と伺ふん呂布ぐ曰くいるへ四へるまだ行んとそふ。陳登ぐ曰く。泰山の孫観吳敦ホい味方ゑ従ぐふといへぐ。回忠のんあるぐ。くまべうぐ。呂布大ゑよ後ぐ。你いまひとゑ忠義の人ゑ。労と辞せぐ君の為ふすといふ。後陣と按へきをまだ陳登数十騎をそ。蕭関へいろ陳宮と臧霸朝ゑあるく。合戦のやうと問呂将軍ゑるゑる御辺ゑと疑ふと。

ゑ後ぐ」こそ。あるゑ来りゑぐ。かるるぐ害せらるべそぐと。私沿れば陳宮ぐ後ひさやるる。我ゑるゑと疑りるべそいま曹操が勢さそんゑうといへどもくしふしそ。かるるぐ変あらんゑと料りるをホ難慮ゑさへそ。合戦をせぐ。ゑの故ゑをあるそ。危うそるる。呂将軍をまだ小沛の城をとそひゑへべそゑ。何とそゑる来りゑへ。陳登や。るるいゑま御辺と疑ふそなり。油断ゑるぐ害ゑあひゑんそゑ。高櫓ゑのぼりそのぐそうえん。曹操が大軍まぐゑ濠ら辺まぐゑ」すせなり。るるゑぐ。ひそゑる内応の書簡と三通書そ。笠前の根ゑ付沢中ゑ曹操が陣へ射ゑる」て次の日るるれそ出んそそゑる陳宮や。るるえ。ゑの虜いるゑ示す。要害ゑ呂ゑさへそ危うそるる。呂将軍をさそゑそ。小沛の敵を追ふそひゑへ陳登

陳登夜
曹操が
陣中へ箭章を放
陳登

るを是由とかさんとて。馬をとばして回り。呂布をうんとやるべし。其行き向とて。按ず違ひ孫観呉敦ホとゝる野心を出して。曹操を引入れさせ某す。陳宮と計事をあらそひ。今わかるゝ。将軍を討たゞんといへり。呂布よろこび申けるは御辺もまづ行ぎんが。我ゝ大事をあやまらん。再び行き陳宮と計を合せ。今夜大の手をあげて合圖をせよ。我ゝ城をうんで殺さんが。急ぎ陳登兼ねをりれとて。又馳行き陳宮とよび出し。曹操が勢ひをうる山と越て入らるべく。徐州の城を囲むいまゝ此度をまるもまた甲斐なし。さてやうは回て。徐州をとらひ。へとつかれば陳宮あいうなと膳をひやし。取もつれあるべし。蕭関をさて走りる。陳登が関門より大の手をあげて。曹操が勢を引入るゝ。呂布かねての合圖を乗へとて。火の手をあげて。兵を駆て進ときたるゝ。暗さいとらし。半途まで陳宮が勢と出あひ。たがいに敵ぞと心得て。おめ〳〵さけんで戦ふあり。曹操が軍を引さんぐゝに蒐破りしゝ。呂布を陳宮ものがれさるゝを討きて。呉敦孫観ホに行方をさらぬ夜あけそのち陳登ら回り忠で。曹操を引入さりといふ沙汰しられば呂布ものの有るゝ作大しく討のおされる兵とあれめ陳宮ともに徐州へ回り城中へ入んとさるゝ。矢倉のうへより。矢を放りて雨のおとくうりれば。はいるゝと驚ちる。麋竺城上に立あらられ。大音声をあげて。呂布匹夫。你詐りをるゝ君の徐州を奪へり。いま旧のおとく可へとて。そ者ゝ何方へ。落行とおりる。呂布問ゝ陳珪

手間ゝ居ぬゝ。樂笙おそへて曰ク。主と共に斬て捨たり。呂布色を失ひ左右をかへりみて。陳登いはく。今朝より行方たゞしきに。陳宮怒りて常に某が諫めやせしかゝるべしと推しはかるに。将軍彼がまよひさまを。某と用ひ給ひ。いま是のごとくなる至りとて。猶迷ひを取て悪人を尋ぬるに。呂布後悔すれども及ばず。為かさなる小沛を攻撃ん。何とか来たると問ふ。高順が曰ク。某すでに小沛の城を守りて防ぎ戦ふのみ。陳登馬を飛ばして来り君をぞ曹操より囲まれ給へり。速やかに行きたまひなれ。我ずく城を守らんといへり。呂布取あへず兵を引て打出ん。陳宮やらるゝ。おのれ皆奴

が。かゝるとき。かゝるべき曹操が勢を引入べし。呂布歯ぎしりして曰ク。我は陳登父子を重んじ。汝ホが知るべきまでもなし。曹操が内通を怪言を恨とまぐべしとて。小沛を出撃て曹操を打むかふ。陳登が城を清取て。のち曹仁が勢を引入て。呂布が来るときこゝろみ。高櫓の上より大音あげて曰ク。呂布匹夫なるものゝ。我が漢朝の臣なるを。汝が逆賊に従ふ。呂布大に怒て。我が兵を下知して。城を攻んとす。兵を下まち後ず。喊の声地をうごかす。忽ち高順を出して。むかふ一彪の軍馬。おのれ進て。真先にたつ。頭に豹の尾。髭に虎のごとし。とゝろに劉玄德の弟張飛なり。大人の子孫

て高順と火と[illegible]て戰ふに高順ふせぐ敵をべき馬と人と[illegible]迯
そこを張飛勝に乘て呂布が備をうけ入勇を震て戰ふに
又喊のこえ四方よりおこりて曹操が人勢潮のごとくにきたる呂
布小勢にて支るとあらそひ東をは[illegible]れが張飛曹操の
ぐさと追蒐る呂布人馬にをれて付るもの數をまらびてきさ
ぐると逃るおのまゝ一手の勢行先をさえぎり劉玄德の弟
關羽八十二行の青龍刀をひらめかせ又賊いづくへか走るあるよ
く刀を受よとおもふれば呂布是非なく馬をすべて戰ふに
後より張飛雷の落るごとく蒐かけ呂布あ
つとぬきをひて下邳の城へ[illegible]る侯成兵を引て出むかへ救
と城中へ入る關羽張飛兵を收めて一處にあはせ互

に失散の事をものがれ小沛より沒落して海
州にかくれ其の消息をきひて來るといふに張飛が此湯山
へ逃て山賊をなして居るあのよしをきひて來きりといふて
曹操にまゐらへて禮をなしたる玄德にまゐらへたる徐州
の城に入るべ麋竺出むかへて妻子一族の悉く城中にあるよ
しを語る玄德ゑびりをくよろこばるゝに陳珪陳登きたり
ゐる曹操酒宴をもつてけく賀をのべられる中座にて左に
玄德右に陳珪文武の諸將と兩班にをれる陳珪
父子が功を稱揚して十縣の祿をあたへ陳登は伏波將軍と
をそのゝち下邳城をはらのとりをを議されて程昱申るは呂
布大に敗れて下邳の小城に賴ることをもとは呂布と

へるのごとく滅ぶべし。急なるぞ。ぜひ。ぜひ。命をうばんと。淮南の袁術と一つふみうんまうるを。紀ハ由こしき大事なり。志ゝ大将とそらんぜ。淮南の路條を守らせ。外袁術を甚だ内呂布を妨げしめ。いかゝ呂布が大将。臧霸孫観。どいふ異ゝ紀をもつて。なを山東を薄まむるを。是まゝ用ゐがたし。叶はじ。曹操の曰く。なるほどよく我意なるあり。山東の路ゝ我ゝ守らん。淮南の路條ハ玄徳守りゐへ。玄徳の曰く。丞相の尊命あるを敢て違ふやとそ。はるの日手配とる。糜竺簡雍をと。どうぞ徐州を守らせ。ぞうら関羽張飛孫乾を引連て淮南の路をそなへさせ。邳郡をさして寄せ

繪本通俗三國志二編卷之四終

122
74
28

繪本通俗三國志

二編 四

122
74
28